

設定課題 4. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

ニホンザルの性行動の出現機構

榎本 知郎(京大・理)

霊長類の社会構造にとって、オスとメスの性的関係は基本的なものの1つと考えられる。その機構の一部は、性行動の研究から明らかになるものであろう。私は野生のニホンザルの群れにおいて、性行動の出現の機構を明らかにする試みとして、オスとメスの間に見られる行動の種類及び出現頻度と、メスの発情の時期や強さ、順位、オスとメスの年齢及び血縁関係やグルーミング関係などの個体間関係との相関を求めようとした。また、これを基礎にして、各行動の記号の意味とその機能を明らかにする試みもすすめているが、これについては第3回ホミニゼーション研究会の抄録を参照されたい。

調査は1972年7月13日～8月2日、9月20日～10月1日、10月25日～11月26日、長野県地獄谷の志賀A群を対象に行なった。双眼鏡と小型ノートを使用し、行動を記号化して記録した。メスの発情は、顔の赤さ、性皮の腫脹、性器からの分泌液の有無、オスへの接近、交尾、発情に特徴的な音声などから総合的に判断した。

オスとメスの間の性的な交渉は、つぎの7つの型に分けることができる。

I. ディスプレーが見られ、交尾を開始してからも安定した経過をとり、最後に射精に至る、オスとメスが相互的にすすめる型。

II. メスが一方的にオスに迫従する型。メスの積極性とオスの拒否を示す。稀に交尾に至り、その場合は射精に至る。

III. オスが一方的にメスに迫従する型。オスの積極性とメスの拒否を示す。これで交尾に至る例は観察されていない。

IV. 交尾に入る前に、オスのディスプレイ等の行動は見られないが、交尾はかなり安定している、オスの弱い積極性とメスの非積極性を示すものと考えられる型。

V. 交尾に入る前に、通常オスのディスプレイ等の行動は見られず、交尾もマウンティングの間隔が不揃いで、メスが交尾の姿勢をとらない場合が多いことなど不安定で、長続きすることはなく、また射精も見られない型。これはオスの弱い積極性とメスの弱い拒否を示すものと考えられる。

VI. メスが主導的で、オスのディスプレイ等も見られず、交尾も不安定であるが、かなり長く続くことが多い型。射精は見られない。

VII. メスが発情した場合でも、オス・メスとも相手に

関心を示さない型。

これら7つの型のうち、VII型を除けば、I型が最も一般的でよく観察され、III型、II型がそれに次いでいる。I型のペアには、オスが追いかけてまわす行動がほとんどの例について見られている。またこの型では、オス・メスの双方が相手に接近するのが見られている。その逆に、VII型やV型では、メスからの接近は、グルーミングへと続く場合を除けばほとんど見られず、オスからの接近も少い。II型はメスがジュヴェナイルか、まだ若いおとなのメスである場合によく見られる。III型は、8頭のおとなのオスのうち順位が4位以上の個体に見られた。VI型は、オスがジュヴェナイルである場合にのみ見られる。V型は、母親とその息子、仲の良い姉と弟、仲の良いいとこ同志といったごく近い血縁のペアに多く見られる。また、VII型も近い血縁のペアに多い。

グルーミングの見られるペア、メスが依存的にオスの近くにいたといった関係を示すペア、オスがメスを追いかけてまわす行動の見られないペアは、圧倒的にVII型を示すことが多く、V型がそれに次ぐが他は少ない。したがって、この2つの型は血縁者間に見られるというより、むしろ親密な関係に見られると考えてよい。多くの性的な交渉は、メスが発情していることが必要であるが、IV、V、VII型は発情していないメスとオスとの間にも見られている。また、発情のはじめはIV型であったものが、発情が強まるとともにIII型に移行する例、II型からI型へ移行の例など、メスの発情に伴う変化も見られている。

以上、今まで続けている分析の一部を簡単に述べたが、はじめに述べた行動に影響を与える要因以外にも、発情等に関するホルモンなどの生理的な面の分析が重要であるが、それは今後の課題としたい。また、親しい間柄にあるペアには何らかの交尾に対する抑制が働いているものと考えられる。これは栗越(1973)の報告の一部を支持する結果になった。こういった点からインセストをめぐる心理的な抑制という問題を再検討できるのではないかと考える。

自然環境下におけるニホンザルの mounting 行動の比較行動学的研究

水原洋城(日本モンキー・センター)

46年度共同利用研究「自然環境下におけるニホンザルの攻撃的行動の発達に関する比較行動学的研究」では、主として幼児期における mounting 行動の発達過程を、